

2023.11.19 大阪自然史フェスティバル 日本野鳥の会大阪支部 講演

えのもと よしき

榎本佳樹生誕150年記念事業2023

# 榎本佳樹をめぐる人々

榎本と時代を共にした野鳥観察者たち

- 1 野外鳥類研究の草分け 榎本佳樹  
榎本佳樹とその時代を振り返る意味
- 2 日本野鳥の会黎明期の人々
- 3 榎本佳樹の「野鳥便覧」
- 4 野鳥便覧と同時代のフィールド“図鑑”  
日本最初のフィールドガイドは？
- 5 生誕150年記念事業について



榎本佳樹 (1873年～1945年)  
写真 1938年(昭和13年) 65歳

日本野鳥の会大阪支部 支部長 納家 仁

# 1 野外鳥類研究の草分け 榎本佳樹

発足当時の大阪支部の探鳥会で、指導者として活躍された榎本佳樹は、当時「鳥学界の至宝」と称されるほど著名な野外鳥学の第一人者でした。

その著書「野鳥便覧上・下」は、野外識別に重点をおいた画期的な野鳥図鑑であり、鳥の全長や翼の長さなどの数値は、現在の鳥類図鑑の多くが野鳥便覧の数値を引用しています。

もう一つの著書「野の鳥の思い出」には、榎本の野鳥観察記録やシギ・チドリ、ワシタカ類の野外識別方法などが記載されています。



野の鳥の思い出  
1942年 日新書院



むくどり通信

特集  
榎本佳樹の野鳥愛  
— 榎本の思いを今に —

2023. November

No. 280

日本野鳥の会大阪支部

11

2023年は、榎本佳樹の生誕  
150年にあたる年です。

日本野鳥の会大阪支部の  
機関紙

『むくどり通信280号』  
(2023年11月号) は、  
榎本佳樹生誕150年記念  
特別号

日本野鳥の会大阪支部  
の黎明期を支えた  
伝説の指導者  
榎本佳樹の足跡を  
追った大特集

榎本佳樹生誕 150 年記念特別号

# 榎本佳樹とその時代を振り返る意味

榎本は、自分が観察した野鳥の記録や生態などを、動物学雑誌（日本動物学会）、鳥（日本鳥学会）、野鳥（日本野鳥の会）、鳥獣報告集（農林省）等に数多くの報告、論文として発表されました。

榎本の残した観察記録は、明治、大正、昭和（戦前）の野鳥の生息状況を知ることのできる貴重な資料となっています。特に、淀川河口や住吉浦にはよく通われシギやチドリを詳細に観察するとともに、開発により生息地が失われていくことを憂い、その保護の必要性を事あるたびに訴えていました。

「鳥類の将来に関しては実に寒心に堪えないものがあり、大阪府では特にそれが甚だしい様に思われるから、鳥類を愛好する人や、鳥類研究を事とする人等は、鳥類に関する知識に愛護心の普及に努めることを第一の急務とせねばなるまい。」（大阪府郷土博物誌第1編（昭和9年刊）大阪府の鳥類についてより）。

この言葉からも、榎本の野鳥保護への強い思いが読み取れます。

**榎本の生きた時代**は、鳥は撃ち落としたり網で捕らえて食べるもの、捕まえて飼うものであり、観察して楽しむという人はごく一握りでした。又、都市部周辺での開発が急速に進み、特に大阪では多くの自然が失われ、野鳥がその数を大きく減らした時代でした。

榎本は、著書「野鳥便覧」の中で、鳥を見る人の心に及ぼす精神的な影響を種ごとに明記し、鳥が人間にとってなくてはならない存在であること、鳥を保護することの重要性を繰り返し訴えています。

戦乱の世相の中で、鳥や自然を愛する心を広めようと務めた榎本。

時代を先取りした野鳥保護思想と言える「榎本の野鳥愛」は、今の時代に生きる私たちにも大きな勇気を与えてくれるものです。

榎本が早くから警鐘を鳴らしたように、シギやチドリは大きく数を減らし、今やそのほとんどが絶滅を危惧される状況となっています。夢洲をはじめ大阪湾岸の水鳥生息地が失われようとしている今こそ、榎本に学び、その思いを伝え広めるときではないでしょうか。

## 2 日本野鳥の会黎明期の人々

日本野鳥の会：1934(昭和9)年、中西悟堂が創設

**中西悟堂** 1895～1984年

思想家、歌人、詩人、天台宗僧侶

- ・ 悟堂が編集する機関紙「野鳥」に榎本が数多くの記事を執筆。
- ・ 悟堂の「野鳥ガイド」（1938年発行）のワシタカ類の解説は榎本が担当。
- ・ 「野鳥」102号榎本佳樹古希記念号の発行。悟堂作の詩「榎本佳樹翁」を掲載（自身の詩集「叢林の歌」にも収録。）
- ・ 雑誌「文芸春秋」（1942年11月号）に「野鳥を追う人々」として悟堂が榎本のことを詳しく紹介。
- ・ 「野の鳥の思い出」の出版を悟堂が企画・実現



榎本と悟堂の関係については、昨年の自然史フェスティバルでは、を詳しく紹介しました。

大阪支部HPから当日の講演の様子をYouTube動画でご覧いただける他、パワポ資料も公開しています。

2022.11.19 大阪自然史フェスティバル 日本野鳥の会大阪支部 講演

榎本佳樹生誕150年記念事業2023 プレ企画

えのもと よしき

なかにし ご どう

## 榎本佳樹と中西悟堂

～野外鳥類研究の草分けと野鳥の会創始者 二人のつながり～

- 1 榎本佳樹 野外鳥類研究の草分け
- 2 中西悟堂 日本野鳥の会創始者
- 3 榎本佳樹の「野鳥便覧」
- 4 中西悟堂の「野鳥ガイド」
- 5 「野鳥」誌に見る榎本佳樹
- 6 生誕150年記念事業について



榎本佳樹 大阪住吉浦にて  
1936年（昭和11年）12月 63歳

日本野鳥の会大阪支部 支部長 納家 仁



# 文芸春秋 昭和17年11月号

中西悟堂が「野鳥を追う人々」として、川口孫治郎、榎本佳樹、中村幸雄、仁部富之助の四氏を紹介 「野外鳥学の四天王」のうち、榎本についてを最も紙幅を多く割いて紹介している



榎本は、文芸春秋での記事のおかげで、世間に知れ渡り、意外な人や久しく交際の中絶していた旧友などから称賛の手紙が来るといありさま、人から褒められたことが無い私が多くの人から称揚されるような奇跡に邂逅したと悟堂に感謝している。







## 【鳥類学者】

**内田清之助** 1884~1975年  
農林省林野局猟政調査室技師から東大、京大、東京高農などの講師を歴任。鳥類関連の著書を多数発表し、鳥学の発展と野鳥の保護に大きく貢献された。  
「野鳥便覧」上巻の序文を執筆



## 川村多実二 1883~1964年

1936 (S11) 年、日本野鳥の会関西支部（後に京都支部と阪神支部に分離）創立に伴い初代支部長に就任  
・『鳥の歌の科学』（1947年）発行  
京都帝国大学教授・生物学  
比叡山の鳥類保護に尽力

この写真は、1936 (S11) 年3月15日、野鳥の会の大阪講演会でのもの。

この日は、日本野鳥の会が「初めて大阪進出した日」と野鳥誌に記録されている。

国内で初めての  
支部結成  
1936：関西支部

1937：京都支部  
と阪神支部に分離

1939：阪神支部  
から神戸支部が  
分離独立し、阪神  
支部は大阪支部と  
改称

# 京都支部比叡山探鳥会での川村多実二と榎本佳樹

比叡山延暦寺  
釈迦堂前

1939年5月28日  
中西悟堂撮影

榎本66歳  
川村56歳



【在野の野鳥研究家】

# 川口孫治郎

1873～1937年



和歌山県有田郡出身、榎本と同年。東京高等師範学校卒、京都帝国大学法学部卒。鳥類研究家、民俗学者。和歌山県佐賀県、岐阜県、福岡県で教職に奉じ、名校長と謳われるなどその職務を全うする一方で、余暇を鳥類の生態観察とその記録に捧げた。

- 野鳥の声の「ききなし」を提唱
- 著書に「日本鳥類生態学資料」、「自然暦」
- 農林省の鳥獣調査囑託者会議の際に同宿し、川村、榎本の三人で鳥談義に夜を明かしたというエピソードも

※自然暦の新装版が2013年に八坂書房から出版





## 小林桂助 1908～2000年

1939年神戸支部独立時の神戸支部長榎本とは鳥類研究上の手紙を交換。野鳥の会の講演会や探鳥会でも交流。

※大阪支部が保管している「野鳥便覧」は、小林氏のご遺族から2001年に寄贈いただいたもの。

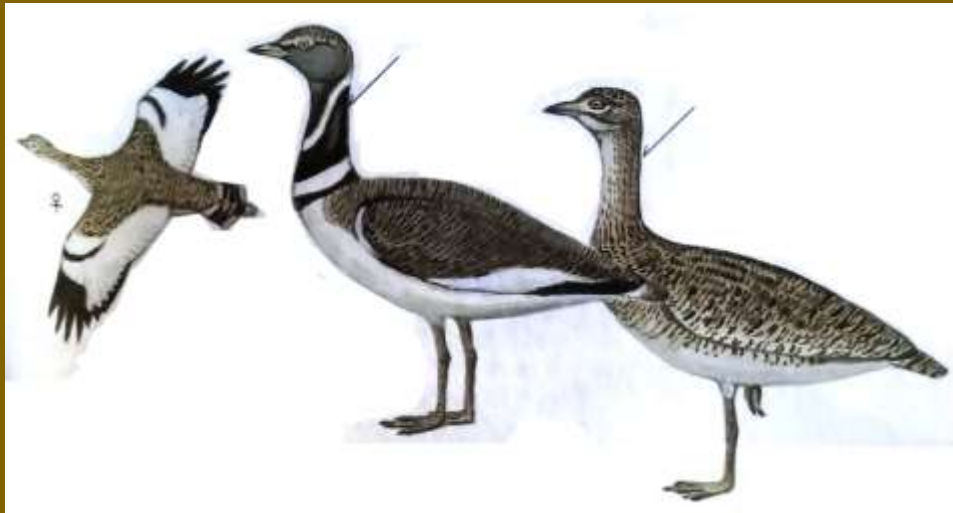
- 先代の小林桂助氏は野鳥の卵の収集家として有名で、石沢慈鳥氏との共著「原色日本鳥卵図説」がある。解説は石沢氏、小林氏が出版費を拠出された。第一集 昭和7年 第十六集 昭和15年刊 208種、1635個の鳥卵を実物大の画で原色刷り
- 保育社の原色日本鳥類図鑑 (1967年)の著者コバケイ図鑑と呼ばれ長く愛用された。





# 安部幸六 1881?~1961年

福岡鳥の会（大正10年発足）理事や後に会長を務め、鳥類研究や保護活動に尽力。有明海でのシギ・チドリ観察や英彦山などの探鳥に榎本を案内。同氏からの依頼で榎本が標本を鑑定し、日本初記録のこの鳥にヒメノガンという和名を命名した。



「フィールドガイド日本の野鳥」から



日本鳥学会「鳥」第50号

## 大阪支部（阪神支部含む）の活動を支えた人々



### 森田淳一

初代支部長（大阪高等学校教授、生物学）

野鳥便覧上巻の発行を全面的に支援。

樺太探鳥旅行同伴など榎本とは各地に探鳥に出かけた。

### 守山鴻三（白雲）

初代幹事（自宅を事務所に）

阪神支部の創設に尽力。

初代幹事として支部の  
揺籃期を支えた。

※白雲と号して随筆など  
を野鳥誌上で発表。

1959年には湘南支部設立。

大阪支部には氏直筆の

「百舌鳥耳原風景」と  
題したモズの絵が現存。





## 平松道夫（第2代幹事）

第1回箕面探鳥会（1937.3.14）で初めて榎本に  
会って以来、探鳥会の度に随行し、榎本の直接  
の指導を得て、師と仰ぐように。



## 岡田康稔（改名前は岡田稔）（第2代幹事）

大毎野鳥の会主催の岩湧山探鳥会（1937.7.18）で  
初めて榎本に会って以来、機会あるごとに  
榎本の指導を受ける。

1942年、本部幹事となり、悟堂のもとで  
「野鳥」誌編集等に携わる。

※後に大阪府の初代の鳥獣保護員  
として活躍された。



岡田康稔さん（前列左から4人目）を囲んで  
2003年5月25日





## 堀田光鴻（第3代幹事）本業の傍ら野鳥生態画家として活躍

「親子のように私の家族とも親しくして頂き、幼少の時父を失った私には一しおなつかしく思える。」

「野鳥」102号 「榎本先生の古希を祝して」から。

一方、榎本も「鳥のおかげ」の中で、家も近く、堀田氏と一番お会いしている回数が多いと書いている。

※1940年大阪ガスビルで野鳥生態画展覧会、翌年神戸大丸で個展開催、1943年には新宿伊勢丹でも開催。

堀田光鴻氏の祖父の堀田龍之助は幕末から近代に博物家として有名でした。鳥の博物画も多く残されていたようで、昭和13年、榎本は野瀬口の堀田氏親戚の家でたくさんの鳥の絵を見学したことが野鳥S13.12月号に書かれています。

堀田光鴻氏の作品については、その写真の一部が「野鳥」に掲載されているだけで、今は、その全容が分かる資料などはなく、作品も個人所蔵の形で分散し、その所在等も知るよしもない。



大淀の秋（淀川河口の鶴・千鳥）堀田光鴻



## 藤原廣蔵 (第4代幹事、後に第2代支部長)

野鳥便覧下巻の出版費数千円を支援。藤原氏の支援なしには、野鳥便覧下巻は発行できなかった。  
榎本とは、探鳥会の他、日本アルプスへの探鳥などに同行。

※戦後の大阪支部を平松道夫、岡田康稔の両氏とともに復興、発展させた。

1987年、野鳥保護の功績で勲五等瑞宝章授与。

1987年 叙勲祝賀会  
藤原支部長を囲んで



鳥の保護者

藤原 広蔵



ふじはら・ひろ蔵 柴料問屋社長

日本野鳥の会  
大阪支部報

1961年5月1日発行  
日本野鳥の会 大阪支部  
大阪市南区長堀通  
1の34 白痴書局内

鴨 池 見 学

松根元男

二月十九日 支部の催しで、山田史の森鳥会へ行つた。制舎いに暖かき日曜で、バスをのんびり待つてゐる間、暫く雑談する。バスが来たので、乗つたが我々大娘のそのど、とそそすいてゐる。ひどい砂水コリまじり、目的の池は(ヨツツジ)に着く。又の池はではなく宛の名前である。バスを降りて、双眼鏡を首から吊し初め一行を、同じバスの乗客、ウケン集気に、機目を見せり。通つて行く。悲鳴つてやりたいが、辺りの土は湿りては、何ともおぼろいだら、裏つてやり過ぎ。朝が如く、お初にお目に掛るのは矢張りスズメである。キンバラ蜂へ籠を移されたのも知らないのみ、ハンカに解き換つてゐる。細のガネを見とかくれし乍ら、カミラダタが、ニ、三羽居る。ムクドリも居た。余勝さんの家へ挨拶に着る。クダクダ言つて置いた。梅の木に出たオホシロガ、ロクに歌謡を覚えて仕舞のみ、小さな声で恥し気に囀つて居る。キジバトがあるところから飛び立つ。中宮池の方を見ると、殆んどゴカを許りである。向うの人があそびにハシビロガもあつた事を、教えて呉れる。あそこの処をみると、三羽でシズメ泳いで来る。遠くから見てと嘴の

昭和36(1961)年  
大阪支部報 創刊

『なにわ町人学者』の「鳥の保護者 藤原広蔵」の中で大阪港の干潟で榎本佳樹に鳥の識別をたたきこまれたことを語られている。藤原支部長当時63歳。

毎日新聞社社会部 編『なにわ町人学者』,所書店,1967.  
国立国会図書館デジタルコレクション から引用



写真は  
歌集『水流』から

## 山崎静子（歌人）

学徳高く溫柔なる童顔の高齢者に相對すると、  
このお方が私の父であったら、と思う。・・・  
と榎本を父のように慕う気持ちを書かれている。

探鳥会にもよく参加され、鳥の歌を「野鳥」誌上  
でも多く発表されていた。

大淀の川べに君が聲作るホウロクシギの  
音色しみじみ

空仰ぐするどき瞳チウヒとぞ  
一ことの間にとみけり師は

「野鳥」102号  
榎本佳樹先生の片影 から



**山口勝一** 大阪毎日新聞社事業部長  
1943年 43歳で病死

大毎野鳥の会の主宰者で、野鳥の会とタイアップし探鳥会などを企画実施。大阪支部のため側面から尽力された。

榎本は野鳥誌の故山口勝一氏の追悼文の中で、箕面の山地でのやりとりを次のように回想されている。

…そうすると山口氏は例の快活な口調で「左はヤブサメ右はヒヨドリ」と唱えてにこにこしている。次に何を言うのかと待っていると「中をとりもつヒカリヌス」と付け加えて、愉快そうに笑っておられる。これは私の頭の髪が少なくなっ  
て光っていることから思いつかれた一句で、…その一句を無邪気な罪のないものと快く思って、共に大笑いをした…

「野鳥」109号から 両人の交友関係がうかがえる一コマ

# 岩湧山に婦人も交じる 探鳥ハイキング 風雅な大毎野鳥の会

昭和12年7月19日付 毎日新聞 「第1回探鳥ハイキング」の記事

## 以下要約

- ・ 7月18日午前6時半 難波駅から特別仕立の「探鳥列車」で三日市駅に
- ・ 岩湧寺に向かった会員200余名 うち20余名の婦人会員
- ・ 3班に別れて「鳥寄せ」を行い鳴声とその姿を見学
- ・ 午後 岩湧寺客殿で観会式を兼ねて講演会を開催
- ・ 森田理学博士（初代大阪支部長）の挨拶に次ぎ、  
「関西の鳥宝」榎本佳樹翁が「大阪近郊の野鳥」と題し講演
- ・ 最後に東京からはせ参じた日本野鳥の会主宰中西悟堂氏が「野鳥とハイキング」と題し、鳥の鳴声の声帯模写まで交え1時間半にわたる講演
- ・ この日同会で聞いた鳥の鳴声は26種
- ・ 今回のハイキングを記念するため野鳥愛護の注意書を記した札を山中2か所に立て、愛鳥観念を涵養することに

榎本佳樹の第一声は

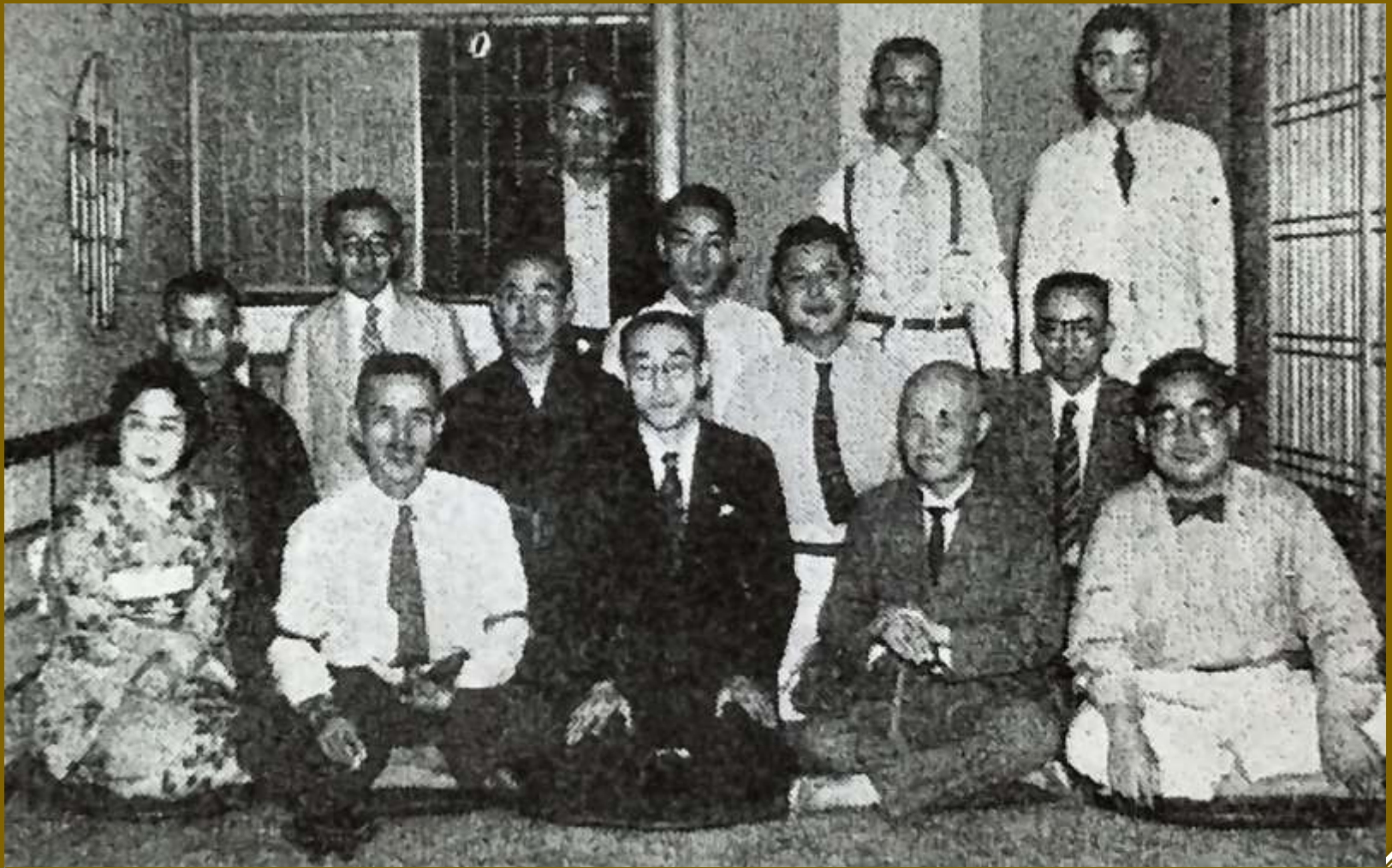
「わたくしは飼い鳥のことは 鶏のことも知らん」



昭和12年7月18日 大阪毎日新聞主催 大毎野鳥の会発会式を兼ねた岩湧山探鳥会（参加者200余名） 多宝塔前での記念撮影

後列左から 山口勝一、中西悟堂、前列左から 守山白雲、森田淳一、熨斗庄太郎、榎本佳樹、大毎：上田長太郎 他





昭和13年7月15日 満州パルプ工業に赴任する平松道夫氏を囲んで

左列前から 山崎静子、森田淳一、平松道夫、榎本佳樹、山口勝一、  
中列左から五人目 堀田光鴻、後列右端岡田康稔

### 3 榎本佳樹 の「野鳥便覧」



上巻78種、下巻216種収録 計294種



上巻 1938年  
3月18日印刷



下巻 1941年  
6月15日印刷

上巻 昭和13年（1938年）、下巻 昭和16年（1941年）に日本野鳥の会大阪支部（上巻は前身の阪神支部）が発行

上巻は初代支部長森田淳一氏が、下巻は藤原廣蔵第2代支部長（当時は幹事）の全面的な資金援助で発行。発行部数は両巻とも500部。

古書店に出ることもない幻の図鑑である。

# 美しく正確な図版

- 生息環境を背景に
- 野鳥画としての価値も高い

小さく描いたため、細部が表れていなかったり、省略された部分があったりするのもしやむを得ないことである。しかしながら相当親切に描いたつもりであるから、図画の欠点のため、種類の違ったものに見える様なのは、沢山あるまいと信じている。



第VI圖



第IX圖



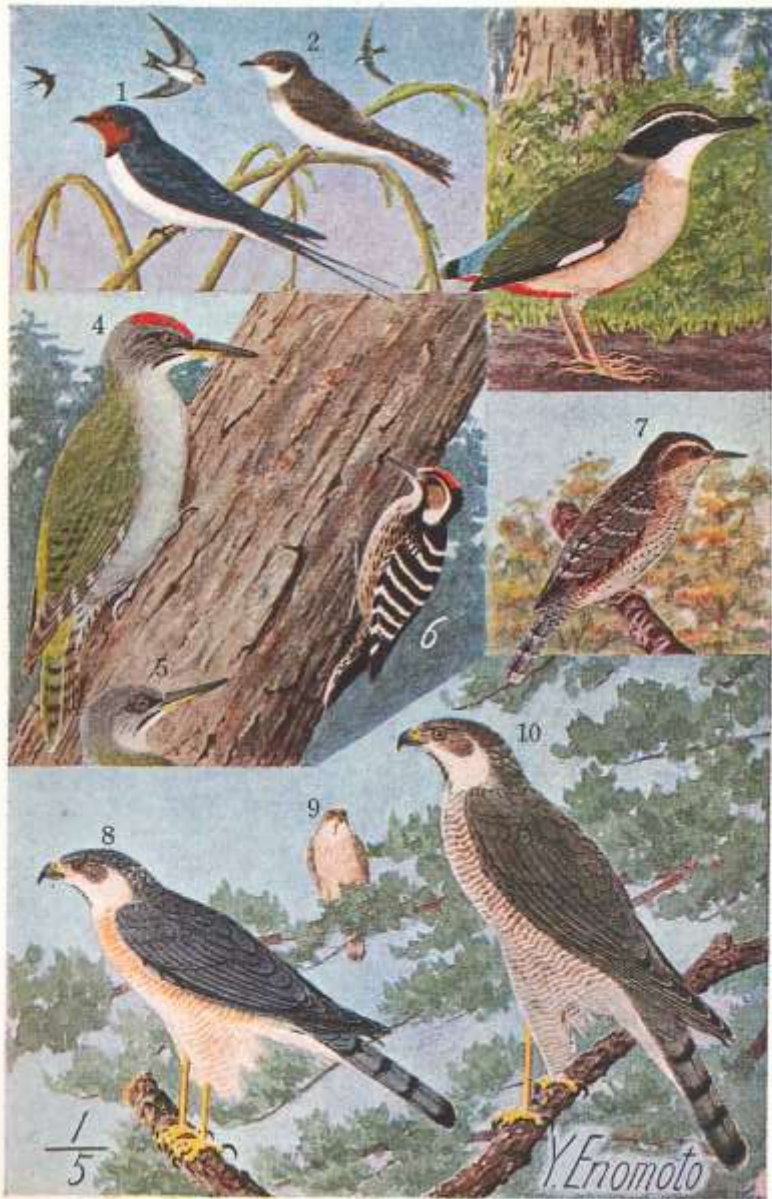
第XIII圖



第XIII圖



VI



$\frac{1}{5}$

VIII

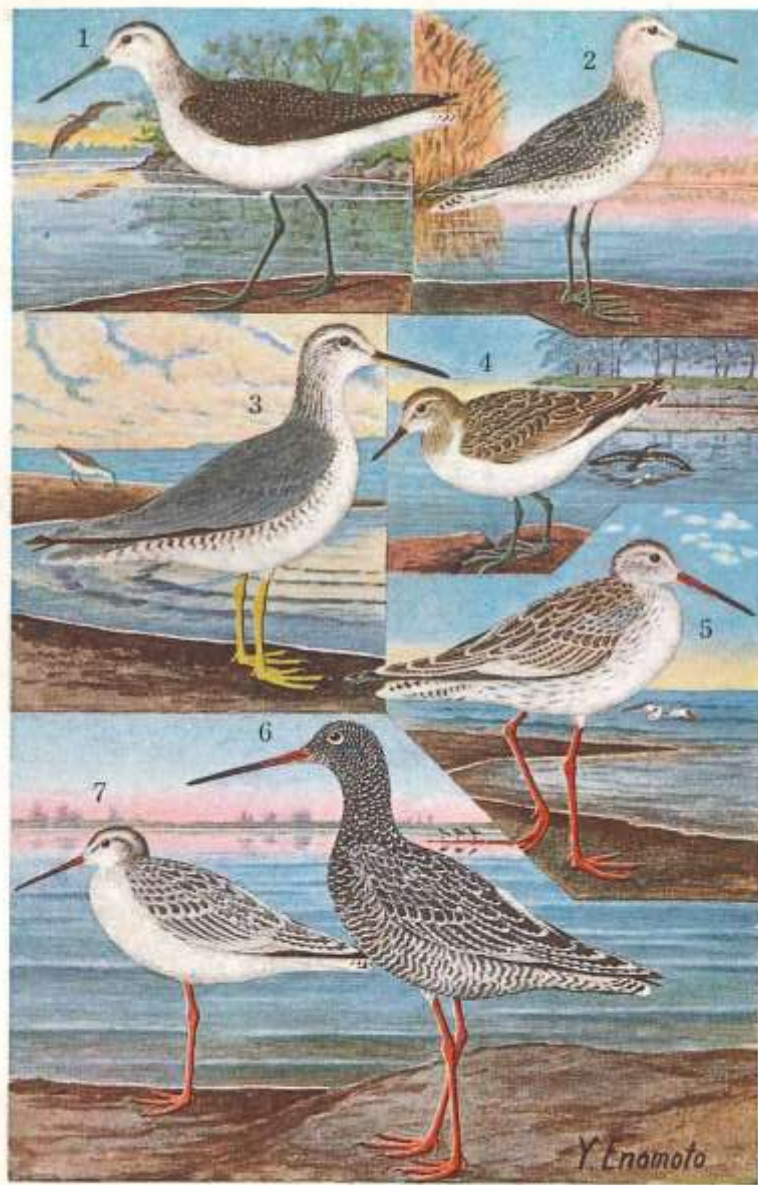


$\frac{1}{5}$









面上に高く出て軽く浮び、バンが遊ぶ様に、頭部を前後に動揺させて調子をとる。鳴聲はチリッ、ピリッ、キリッ等にきこえ、トウネンの聲に似た所がある。飛方は他の小型鷓類に似てゐる。蕃殖期以外は主に水上生活をしてゐて、陸地から遠い外海で見ることもしくない。雌雄二羽だけで居ることもあるが、十數羽乃至五六十羽、或はそれ以上の群をなしてゐる。食餌は昆蟲類、貝類、其他水面に浮遊する小動物等が主で、それ等は地上を歩いて採ることもあるが、通常右へ左へと電光形に遊ぎながら、忙しさに採食する。獵鳥となつてゐるが、習性上早く絶滅する虞がある外、水を遊いでゐる形が優美で、且頗る愛らしい點もあるので、寧ろ保護を加へる必要がある。北半球の最北部諸地方で蕃殖し、冬季は歐洲南部、アフリカ北部、印度、馬來半島、ニューギニー北方、ペルー等の緯まで南下する。我國では樺太、千島、北海道、本土、伊豆七島、琉球、臺灣、朝鮮等に分布し、少い種類であるが、前種よりは多い。

#### クサシギ XXI の 1

##### *Tringa ochropus* (LINNÆUS) 鷓 科

獵。冬。所により旅。鷓型。ムクドリ大。少。河川湖池等の水邊とか、水溜のある水田の様な所に棲み、腹部が白く、背が暗褐色乃至黒褐色に見えるムクドリ大の鷓で、飛んでゐる時には、腹、上尾筒、尾羽の大部分等の顕著な白色部が現れ、又飛立の際、通常ツイ、ツイツイ（各節共ツガ低くイが上る）と清らかな鳴聲を出す。飛方は直線状であるが、飛立つて暫くの間はタンギに似た所がある。大群をなすことなく、通常單獨か二三羽位、多くも四五羽までの小群を見るに過ぎない。食餌は水邊の小動物が主である。採餌のために歩いてゐる時、イソシギの様に、體の後部を上下に揺る習性があるが、同鳥の程甚しくはない。獵鳥として肉味は佳良であるが、棲住数が少いため、濫獲すれば早く絶滅する虞があるので、保護の必要がある。形が優美で、飛ぶ時の鳴聲も悪くないから、風致上の價值も少くない。歐亞兩洲の各北部で蕃殖し、冬季にはアフリカ北部

印度、印度支那、滿洲、支那、日本等に渡る。我國では廣く各地に分布するが、數に於ては多くない。本種と見誤ることがあると思はれる鷓は、イソシギ、タカブシギ、コアヲアシ、ギ位のものであるが、(一)イソシギは本種に比べて嘴と脚が短く、背面幾分淡色で、上尾筒とその附近に白色部が無く、體も小形で、鳴聲も遠ひ、(二)タカブシギは本種よりも小さい割合に脚が長く、上尾筒とその附近との白色部が狭小で、鳴聲が異り、(三)コアヲアシ、ギは本種に比べて、土面灰色に富み、上尾筒とその附近との白色部が狭小で脚が遙に長く、鳴聲も遠つてゐるから、何れの種類とも識別可能である。

#### タカブシギ XXI の 2

##### *Tringa glareola* (LINNÆUS) 鷓 科

獵。旅。鷓型。ムクドリよりも僅に小。少。クサシギに似た點はあるが、その差異は既に述べた通りである。鳴聲は清らかなピッピッピッピッ、チッチッチ等きこえ、飛立つ際は、大抵此聲を出す。食餌は水邊に棲む小動物の外、昆蟲類、蜘蛛類等も食べる。通常單獨乃至三四羽位の小群で居るが、渡來の當初などには、相當大群を見ることがある。以上の外、習性は概してクサシギに似てゐる。獵鳥としての價値や風致的關係等も略々前種と同様である。歐亞兩洲の各北部で蕃殖し、冬季南下の極限は、アフリカ北部、印度南部、南支那、濠洲大陸等に達する。我國では全土に分布し、千島では蕃殖するが、一般に棲住数は多くない。本種と見誤ることがあると思はれる鷓は、前記クサシギの外、イソシギとコアヲアシ、ギであるが、(一)イソシギは本種よりも脚が遙に短く、その割合に體が肥大で、體の後部を上下に動かすことが多く、飛んでゐる時翼に白色横帯が現れ（本種にはなし）、上尾筒とその附近とに白色部が無く（本種にはあり）、(二)コアヲアシ、ギは鳴聲、飛方、棲住場所等が本種に酷似してゐるが、嘴、頸、脚共に、體の割合上本種よりも著しく長く、色彩に灰色が多いこと等が主な差異である。





# 下巻巻末の日本産主要鳥類測定表

鳥名	全長(種)			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開張			體重(々)		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
ハシブトガラス	595	532	565	375	330	356	245	210	228	70	65	68	70	60	63	1195	985	1048	220.0	138.0	178.0
ハシボソガラス	540	462	502	347	300	324	212	176	195	60	45	53	65	57	61	1065	910	985	194.0	114.0	150.0
ミヤマガラス	495	436	468	336	300	312	185	160	173	62	50	57	55	45	52	947	882	895	154.0	95.0	
カサハギ	480	400	445	213	180	200	260	200	233	35	30	33	50	43	45	620	515	573	72.0	45.0	59.0
ツナガ	385	342	365	138	130	135	230	200	218	28	26	27	36	34	35	428	380	406	21.9	17.6	18.9
*ホシガラス	365	325	347	195	178	187	143	125	135	45	40	43	42	39	41	603	573	594	63.0	38.0	
カケス	340	315	328	173	155	167	154	138	147	31	29	30	41	38	39	520	482	500	42.0	30.0	36.0
ムクドリ	243	225	238	135	123	129	70	63	68	27	24	26	31	27	30	412	383	404	26.0	18.0	23.0
コムドリ	198	183	192	110	102	105	54	48	51	17	15	16	26	23	25	328	303	318	18.0	12.0	14.0
シメ	192	179	185	108	95	105	58	52	55	21	19	20	22	20	21	325	302	314	17.0	12.0	14.0
イカル	235	220	228	115	106	111	86	86	82	24	22	23	25	22	24	342	320	332	23.0	16.0	19.0
オホカハラヒワ	162	146	155	92	81	87	65	55	61	12	10	11	20	17	18	277	250	265	8.2	6.1	7.0
コカハラヒワ	144	125	135	84	75	78	53	42	48	12	10	11	17	15	16	237	205	222	6.6	4.5	5.3
マヒワ	130	117	124	75	71	73	50	43	47	11	10	10.5	15	13	14	229	206	218	4.3	3.0	3.6
ベニマシコ	158	145	152	72	65	67	75	67	71	8	7	7.5	18	16	17	216	200		5.6	4.1	4.7
ウソ	161	148	156	88	79	85	67	60	64	10	9	9.5	17	15	16	266	245	257	7.9	5.7	6.7
*オホマシコ	180	162	173	95	87	91	74	65	70	12	10	11	21	19	20	285	257	274	8.9	5.8	7.6
*イスカ	186	170	180	100	90	96	70	60	65	19	16	18	19	17	18	290	265	281	11.8	9.0	10.4
アトリ	170	148	161	98	85	93	70	58	65	14	12	13	20	18	19	275	239	254	7.6	4.7	6.3
スズメ	148	135	144	75	65	68	57	50	53	12	10	11	18	16	17	234	213	227	7.0	4.8	6.0
ニウナイスズメ	144	131	139	75	67	70	52	46	50	12	11	11.5	18	16	17	228	208	220	6.8	4.7	5.6
ミヤマホウジョ	164	147	156	78	70	74	74	63	68	12	10	11	20	18	19	218	197		6.3	4.4	5.3
アラジ	163	151	158	74	70	72	70	64	66	12	11	12	22	18	20	225	208	221	6.7	4.8	5.7
ノジコ	148	135	142	74	65	68	60	52	56	11	10	11	19	17	18	215	196	206	5.8	4.4	4.9
ホウジョ	168	158	165	81	71	76	75	70	73	12	10	11	20	18	20	245	230	240	7.0	5.2	6.1
ホウアカ	165	148	160	78	68	73	70	60	65	13	10	12	22	20	21	234	213	231	7.0	5.1	6.1

現在の図鑑のほとんどが、この測定値を引用している

# 「野鳥」誌での広告コピー

## 野鳥便覧上巻

着色図版十七、掲載鳥類七十八種。

- ・至宝榎本翁が五十年山野踏査の収穫を見よ
- ・明細厳密なる生態描画はすべて翁自身の筆だ

- …一般家庭不可欠の備付書
- …警察官・其他の必携書

定価 一元五十銭

参考：当時の物価

白米 10kg: 3円25銭

寶發旬中月三・・ 著樹佳本榎 序助之清田内 士博學農

# 野鳥便覧 上巻

書付備の缺可不庭家般一・銃旅・署察警・園物動・館書圖・校學諸  
書携必の他其・官察警・者山登・家獵狩・生學・師教校學・者鳥愛般一

**菊半截版着色圖版十七 (掲載鳥類七十八種)**

野外で鳥の姿を見たり聲を聞いたりして、先づ第一に知らねばならぬのは、その鳥が何鳥であるかと云ふことであるが、斯る場合、野外で見聞する主要鳥類の形状、大きさ、色彩、飛行、歩き方、鳴聲、餌の食方等の中で、種類識別のために必要な特徴となる諸點を判り易く書いた解説と、形状並に色彩を現した圖版とから成る、携帯に便利な小冊子でも持つて居れば、鳥の名が判ると同時に有益な實地研究も出来るのである。著者が此點に留意し、既に五十年間野外での實地研究によつて得たことを資料として作り上げたのが本書で、鳥類研究者は勿論、一般愛鳥者、學校教師、警察官、文學者、學生、狩獵家、登山者、警察官、其他の携帶書として最も必要且最善のものであり、又諸學校、圖書館、動物園、警察署、旅館、一般家庭等の備付書として必要なくべからざるものである。尙本書は從來多くの鳥類書が、複製本による研究を主要資料とし、且分類に重きを置いてゐると異り、野外研究によつて知り得た、生態的特徴の概要を記述することに意を用ひてあるから、野外で見聞する鳥類のことが、何人にも迅速且正確に判る様に出來てゐる點を特色とする。

上巻は野鳥觀察に關する重要事項並に注意すべき諸件等を述べた總説と、春夏の候我内地主要部の山地方面で見聞する鳥類七十八種に就て記述した各説とを載せたものである。

尙下巻には、上巻に載せた以外の内地野鳥類百八十餘種に關する解説と彩色圖版とを收める豫定で、これも亦近い内に出版の運びとなつてゐる。又内地の鳥類部並に植民地の鳥類に關しては誌目編編を出す豫定で、目下着手と計畫中である。

**至寶榎本翁が五十年山野踏査の収穫を見よ  
明細厳密なる生態描画は凡て翁自身の筆だ**

錢十五圓一價定 社音福 資合 通上郡區西市阪大 店賣發  
地番一十三目丁一

著 樹 佳 本 榎

下 卷 野鳥便覧

菊半載百七十頁、掲載鳥類二百十六種  
圖版三十二枚（四色版）

鳥学界の至寶榎本翁が五十年の收穫  
明細正確なる原色畫は凡て翁の自筆

五 月 上 旬 發 賣

定價 二圓五拾錢

發行所

日本野鳥の會大阪支部  
大阪市北區堂山町六八  
堀田光鴻方

電話(市)二一六六番  
振替大阪五二四九五番

實際役に立つ野鳥ガイドブック

「野鳥」誌での広告コピー

野鳥便覧下巻

菊半載百七十頁。掲載鳥類二百十六種。  
図版三十二枚（四色版）

鳥学界の至寶榎本翁が五十年の收穫  
明細正確なる原色画はすべて翁の自筆

實際役に立つ野鳥ガイドブック

定價 二圓五拾錢

参考：当時の物価

白米10kg: 3円25銭

# 4 「野鳥便覧」と同時代のフィールド図鑑

観察手引

**原色野鳥図** 上巻・下巻 三省堂  
内田清之助校閲 石澤健夫・下村兼二著

解説の大部分を石澤が、  
鳥の原色図と解説中の一部、鳴声の  
大部分を下村が担当

- ・ 上巻 昭和10（1935）年6月発行  
本州、四国、九州（属島除く）、  
伊豆七島に繁殖する鳥144種を収録
- ・ 下巻 昭和12（1937）年9月発行  
同地方に出現する冬鳥及び旅鳥等  
124種（図解）を収録

「原色野鳥図」上巻は、榎本の「野鳥便覧」  
上巻（昭和13年）よりも3年前に出版されて  
いた



洒落たデザインのケース付き





序 内田清之助 抜粋  
 近時鳥類生態学の発達するにつれて、鳥の生態写真なども極めて見事なものが見られるようになり、又野外に於いて鳥類の観察研究に従事する人達も専門家のみならず一般人士の間にも次第に多くなって来た。然しそれにも係らず此の方面の指導書が従来一つも出版されていなかったことは、同好者の著しく不便とするところであった。…

はしがき 抜粋  
 近年日本に於ても動植物の研究の趣味が流行し、植物・昆虫・貝類等は数種ずつの美しい原色の手引書が刊行された。然し野外観察を本位とした鳥類に関する手引書は全く刊行されて居ない。著者等は十数年前から、この様な野鳥のガイド・ブックを作って見度いと切望していたが、漸やく機熟して今回刊行される運びになった次第である。…



我国で最初の野鳥のフィールドガイド

## ツグミとハチジョウツグミ（下巻）

日本鳥類目録第2版（1932年）  
当時は別種

ツグミ *Turdus eunomus*  
ハチジョウツグミ

*Turdus naumanni*

日本鳥類目録改訂第7版では  
亜種扱いであったが、  
改訂第8版では独立種となる

上巻には、鳥卵図として37ページにわたり96種100個の卵の原色図が掲載されている。又、山野における自然状態の巣と卵の写真も42種43枚掲載されている。

下巻には、同じく22種25個の卵の原色図が、又自然状態の巣と卵の写真が12種13枚掲載されている。



*ivus* (Gmelin). <sup>チドリ</sup> 千鳥科

秋の渡りは8月下旬—11月上旬  
過し、其数は多い。主に水田・乾田  
リイ チユリイと鳴く。食性・昆虫類  
豆七島・琉球・臺灣・朝鮮。形態  
色と灰白色の斑紋が密布する。顔及び下面は主  
。夏冬中間羽のものが少なくない。翼 155—175

*omelaena* (Pallas). <sup>チドリ</sup> 千鳥科

秋の渡りは7月下旬—11月中旬  
数は多い。一見ムナグロに似るが大  
非する。九州では少数冬季にも見られ  
の小動物（ミミズ・カニ・小貝・昆虫類  
・朝鮮。形態雄雌同色。夏冬異色。顔・頸部  
地に黒褐色の横斑がある。下面は黒・赤・上  
斑がある。但し腋羽は黒色。背面は灰褐色で  
190—205 mm, 尾 75 mm, 嘴長 30—35 mm



ムナグロ  
(前方夏羽, 後方冬羽)



ダイゼン  
(前方冬羽, 後方夏羽)

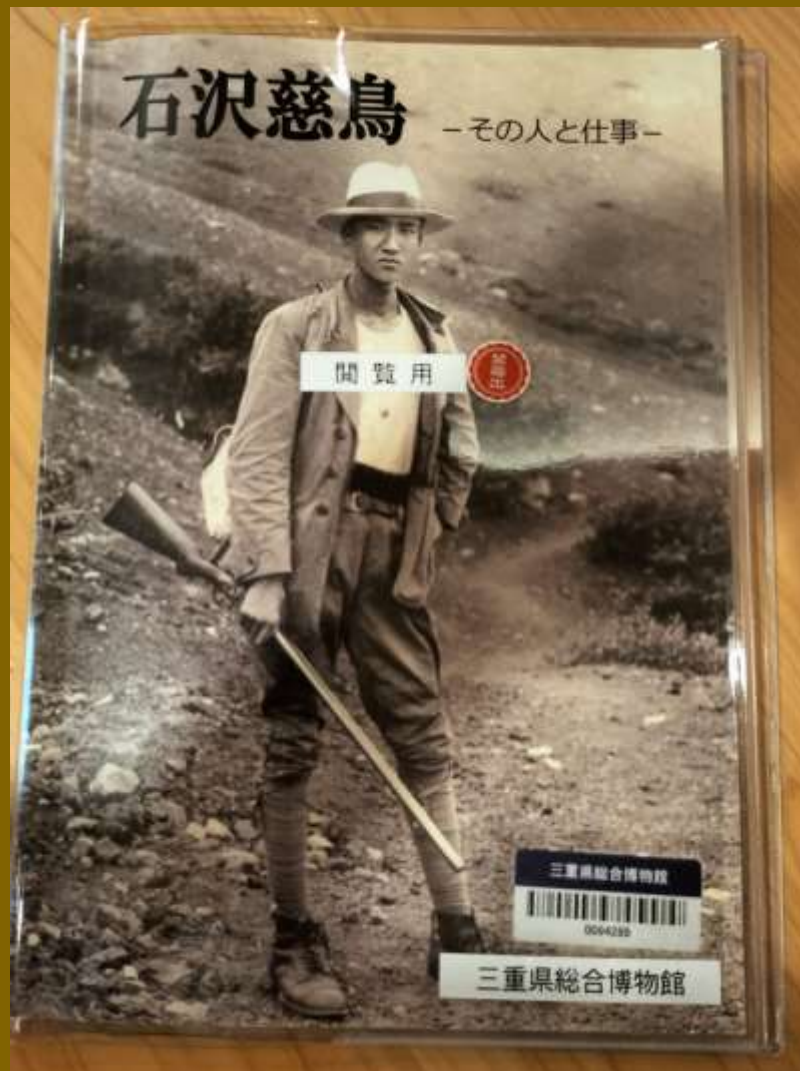
# 石沢慈鳥（健夫）

1899～1967年

明治33（1899）年、山形県生まれ。  
東京農大卒業後、林野庁の鳥獣研究室  
に勤務し、本格的に日本の野鳥を研究。  
1940年には小林桂助と共著で英文の

「原色日本産鳥卵図説」を完成させた。  
1950年から1951年にかけて「原色野鳥  
ガイド（上・下）」を出版。鳥だけでなく  
昆虫の研究者としても知られる。  
退職後も鳥の研究を続け、多くの子どもた  
ちに野鳥を始めとした身のまわりの自然環  
境に興味を持ってもらうために、テレビな  
どの放送番組のシナリオ製作なども数多く  
手がけた。

石沢慈鳥の収集した鳥類の剥製、卵、巢、  
写真、蔵書の約7,000点は山形県が受け入  
れ、「石沢コレクション」として現在、山  
形県立博物館で保管されている。

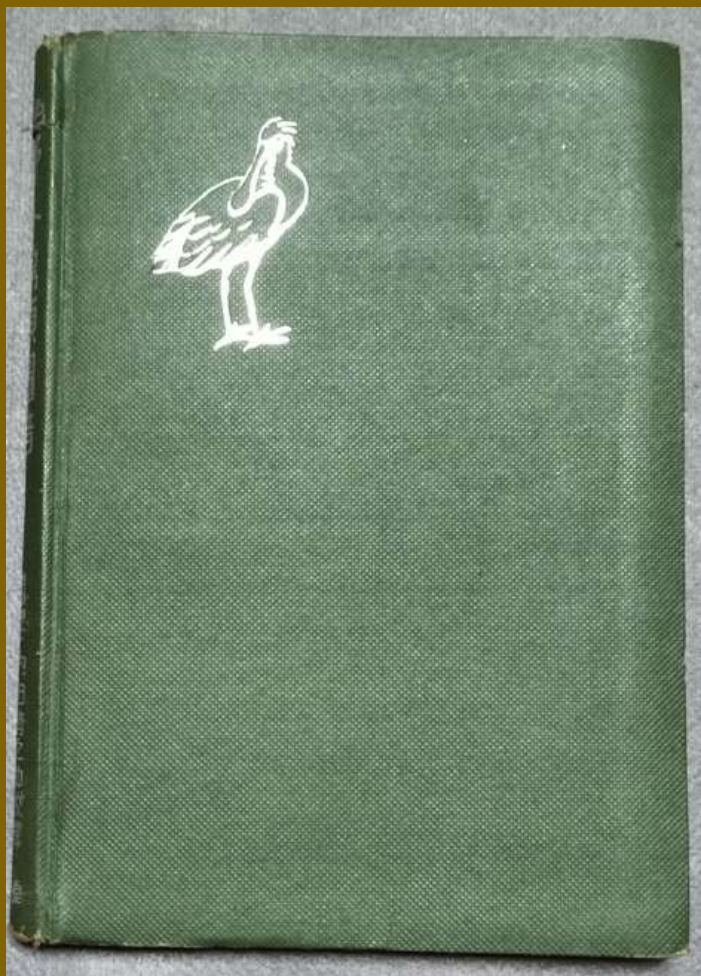


『石沢慈鳥—その人と仕事—』  
石沢慈鳥基金 発行 2018年

参考資料：企画展リーフレット「石沢慈鳥と鳥類」平成25年 山形県立博物館

# 原色野外鳥類図譜

昭和13年 下村兼史著 三省堂



382種（亜種含む）を収録

## 下村兼史（兼二）1903～1967年

日本の野鳥生態写真の草分け  
日本で最初（1922年）にカワセミの写真  
を撮った人として知られる  
1930－31年には日本初の本格的な野鳥  
生態写真集『鳥類生態写真集』（三省堂）  
を発売。後に、自然科学のドキュメンタ  
リー映画監督として、映画『或日の干  
潟』など多くの作品を残されている。



山階鳥類研究所ホームページで資料が閲覧できる



1. トウネン (前:夏羽, 後:冬羽) 2. セバリシギ 3. ヘラシギ (冬羽) 4. ミユビシギ (冬羽) 5. ハマシギ (前:夏羽, 後:冬羽) 6. サルハマシギ (前:冬羽, 後:夏羽) 7. キリアイ (冬羽) 8. タカシギ 9. アカボシギ 10. イソシギ 11. キアシシギ 12. ソリハシギ



1. コカハラヒツ 2. オキカハラヒツ 3. マヒツ (前羽, 後羽) 4. ベニヒツ (前羽, 後羽) 5. コベニヒツ (♂) 6. オホマシコ (前羽, 後羽) 7. ベニマシコ (前羽, 後羽) 8. ウソ (前羽, 後羽) 9. ゴンザンヤシコ (前羽, 後羽) 10. ナキイスカ (前羽, 後羽) 11. イスカ (前羽, 後羽)

# 野鳥ガイド 陸鳥編

中西悟堂著 1938年発行 195頁

野鳥ガイドは携帯用ではあるが、原色図はなく単色線画の挿絵（識別に役立つような精緻な絵ではない）が入れられているだけのもので、図鑑というよりも一般向けの野鳥辞典のようなもの



1938年3月10日  
初版  
この奥付は  
1941年12月1日  
の第4版のもの

初版1000部 戦後にわたり14版まで発行されたベストセラー



ノスリ(鴞) 鷹鷹科 留鳥 禁鳥

(Japanese Buzzard.)

*Buteo buteo burmanicus* Hume.

方言 クソツカ、クソトビ、マグソダカ、タカ

色彩 上面は褐色で、頭部に混ざることのある白色は、少々遠くからでも判ることがある。下面は風切先端部、尾羽、胸部、及び脇の褐色斑等を除いた他は黄白色で、飛んでゐる時の一特徴となる。但し個體によつて上下面共暗褐色のものがあるから識別のためには形にも注意せねばならぬ。雌雄同色。

形態 トビよりも僅に小形で、同鳥に比べて尾羽は短く、翼は長さの割合に幅が広い。静止間に頸を縮め、羽毛を膨らませて

丸くなつてゐることがある。

習性 山地の森林で蕃殖するが、平地にも居る。小獸類、蛇、蛙、昆蟲類、鳥類等を食餌とし、害よりも益の方が多い。樹木の頂や電柱などに長時間とまつてゐることがある。

鳴聲 ビー(イが高い)ときこえるが、鳴くことが少いから、識別に利用は出来ない。

飛翔 羽搏飛翔と帆翔とを交互にし、速度は遅い。帆翔を續けて圓狀に舞うてゐることが多く、

其時の各翼の前縁は殆ど一直線をなしてゐるが兩翼は一直線をなさずに前へ傾き、への字を倒した様になつてゐてイヌワシとの區別點となり、且翼端は上へと傾き、初列風切は指狀に開き其端は上方へ反つてゐる。尙翼の一種の運動によつて少時空中に静止してゐることもある。



ハチクマ(八角鷹) 鷹鷹科 留鳥 禁鳥

(Japanese Honey Buzzard.) *Pernis ptilorhynchus japonicus* Kuroda.

色彩 下面の色彩は個體によつて白色、黄褐、暗褐、暗赤褐等種々あり、又雌の下面は黒褐色斑のため遠くからは暗灰色に見えることがあるから、色彩による他鳥との識別は容易でないが、尾羽にあるV形の黒色横帯は顯著な特徴となることが多い。上面は概して暗褐色で、顔は灰色である。雌雄同色。

形態 凡そトビ大で、大體の外形はサシバに似て、翼や尾羽の長さ等均齊はよくとれてゐるが、嘴は他の猛猛な種類のそれに比べて鈎曲の度が少い。脚は短く趾は少々長い。

習性 山地の森林に棲み、蜂類の幼蟲、蠅等を主食とするが、時として他の昆蟲類、爬蟲類、小獸類、小鳥等も食餌とし、概して益鳥とされてゐる。

鳴聲 體の大きさの割合に小さく、稍弱々しい様な聲で、ビーウときこえるものと、サシバの聲に似たものがあるが、鳴くことは極めて稀である。

飛翔 概して直線狀で、短距離を飛ぶ時は主に羽搏飛翔により遠距離を飛ぶ時は帆翔を混ざる。翼の搏動速度は時によつて少し遅速がある。飛んでゐる時の形も暗々サシバに似てゐる。稀に帆翔と羽搏飛翔とを交互にして、旋回飛翔をしてゐることもある。

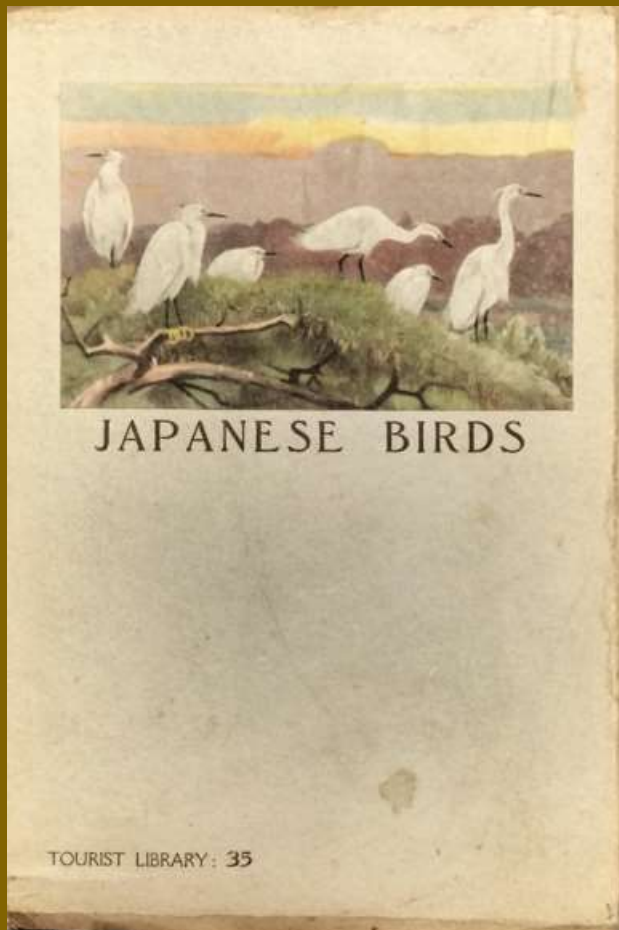
ワシタカ類13種の解説は榎本佳樹によるもの  
右 108頁ノスリ 左 109頁ハチクマ



# JAPANESE BIRDS

鷹司信輔 著 昭和16 (1941) 年発刊

海外からの旅行者向けの英文のガイドブック



鳥類画は小林重三、  
写真は下村兼史の  
ものが多く使われて  
いる



たかつかさのぶすけ

# 鷹司信輔

1889～1959年



1911年、東京帝国大学理科大学動物学科に入学、飯島魁教授に師事。1912年、飯島および兄弟弟子の黒田長禮や内田清之助と共に日本鳥学会を設立、会頭に飯島教授を戴く。父の死去に伴って、1918年6月10日、公爵を襲爵し、同日、貴族院公爵議員となる。公務の傍ら研究を続け、1917年、初の著書『飼ひ鳥』を上梓。同年、鳥類飼育愛好家の会である「鳥の会」を設立、のち会長となる。1922年、飯島の死去に伴って日本鳥学会第2代会頭に就任（-1946年）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

貴族出身の鳥類学者は、蜂須賀 正氏、山階芳麿、黒田長礼、清棲幸保などがいた。





## 5 生誕150年記念事業について

榎本翁の野鳥の生態研究と愛護運動の足跡を多くの人々に伝え、改めて野鳥の保護について考えてもらう契機に

### 【これからの事業計画】

- ・ 「野鳥便覧」復刻版（上下巻・解説含み1冊に）の発行  
2024年2月中旬
- ・ 記念事業企画展の開催 きしわだ自然資料館  
2024年2月23日～3月24日  
榎本佳樹の功績、当時の大阪の自然や鳥類の状況、他に鳥類図鑑の変遷等を展示予定
- ・ 生誕150年記念探鳥会（シーズン2）の開催  
2023年に実施できなかった榎本ゆかりの探鳥地を巡ります  
3月：住吉浦（現平林貯木場周辺）、  
4月：淀川河口（現矢倉海岸）、5月：生駒山など

# 榎本佳樹先生を偲ぶ

平松道夫

戦争の進行と共に沼や荒地が開拓され、山野の森林は戦力増強のため逐次伐り荒されて行ったことなどは先生の心に深い打撃を与えたことであろう。

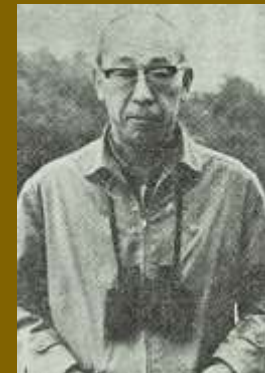
鳥の捕獲、卵の採集、繁殖地の激減など愚痴っぽいと思われる程心にせられていた。

心から鳥を愛し、野鳥の棲息の安否のみを気にかけていられた先生も、戦争中の食料不如意のため逝去を早められた。

明治二十年頃の少年時代から古稀を過ぎる迄の永い間、一市井の徒として、倦まず野鳥の生態研究とその愛護運動に捧げられた足跡は仰ぐだけに尊い。

先生の残されたこの尊い足跡はその著書を通じて、あるいは直接教えを受けた人々によって必ずや継承せられ、先生の地下に眠る霊に伝えるであろうことを信ずる。

「野鳥」昭和二十四年一月号（通巻128号）から抜粋  
※平松道夫氏：日本野鳥の会大阪支部の第二代幹事、藤原廣蔵氏（後に第二代支部長）らとともに支部の黎明期を支えた一人。岸和田市出身。



晩年の  
平松道夫氏

日本野鳥の会大阪支部ホームページで さらに詳しい情報をご覧ください



**榎本佳樹**  
生誕150年記念事業  
ご案内

榎本佳樹の足跡を調べる作業は、時空を超えて榎本さんに、そして同時代に鳥を愛し観察していた先人たちに出会う旅でもありました。

我々が今こうして野鳥を楽しむことができるのは、こうした先人たちのおかげです。そんな思いで鳥を楽しみ、その楽しみを次の世代につないでいくことが本当に大切なことであると今、改めて思います。



**「野鳥便覧」  
を読む**

日本野鳥の会大阪支部 室内例会  
2009.9.13  
担当 納家・上村

日本野鳥の会大阪支部 第4回オンライン野鳥フォーラム第2部 2022.8.29  
榎本佳樹生誕150年記念事業 プレ企画第1弾

**榎本佳樹の見た  
シギ・チドリ**

- 1 榎本佳樹とは
- 2 大阪支部の宝「野鳥便覧」
- 3 「野鳥」誌に見る榎本佳樹
- 4 榎本佳樹の見たシギ・チドリ
- 5 生誕150年記念事業について

担当 納家 仁



大阪住吉浦にて  
1936年(昭和11年)12月